

延年楼の由来

延年楼は、床の間の床板に「天保六年 未 六月 末日」と書かれていることから、今から 180 年前の天保 6 年（1835）に建てられたことが明らかである。

他に偕楽園好文亭内に茶室何陋庵があるが、偕楽園の開園はその 7 年後の天保 13 年（1842）のことであるから、延年楼が水戸市内で現存する最古の茶室と言える。

延年楼は、現在水戸市自由が丘の和田祐之介氏邸内にあり、二畳台目、三畳の間、八畳の間の中央に水屋が工夫されている。

もとは水戸城下馬口労町の豪商大高家の茶室で、石州流の茶を学んだ大高家 6 代織衛門守善が天保 6 年に自邸内に設けた茶室である。「延年」は菊の異名で、大高家 3 代織衛門明郷が菊の栽培に熱心で、邸内に藩内外に有名な菊園があったことに由来する。

「延年楼」の命名者は、宍戸藩 7 代藩主松平頼筠である。前年の天保 5 年（1834）に大高家は宍戸藩から年貢米江戸運送御用を命じられたので、その縁から守善は宍戸藩主松平頼筠に自邸に新築の茶室への命名を依頼したのであろう（石州流水戸何陋会 100 周年記念誌）。延年楼は大高家の邸内（現在は大高家の氏神であった神力稲荷が残る。稲荷の傍らに延年楼があった）に昭和 20 年の水戸の空襲の際にもその難を免れて残り、のち末広町の市街地整理に際し、現在地の和田邸内に移築された。

延年楼は現存する水戸市内の茶室の中では最も古いものであり、水戸城下のすぐれた町人文化を今に残すものである。

水戸藩の茶道は石州流が主流であった。藩主では 6 代治保、8 代斉脩、9 代斉昭が石州流の茶人として著名である。水戸の石州流は、吉田瑞雪齋から藤村朴齋、朴齋あるいはその子の休齋から原魯齋、魯齋から養子尖庵、尖庵から大内適齋へと受け継がれ、尖庵の門人たちによって水戸何陋会が結成された。

石州流水戸何陋会は、明治 42 年（1909）に、原尖庵・大内適齋・大高育齋らによって創設された。創設時の会長は原尖庵で、大正元年（1912）に尖庵が 80 歳で没すると、塙載が第 2 代会長となり、大高織衛門守之が副会長となった。この大高織衛門守之は、織衛門守善の子で、明治 29 年に水戸商工会議所初代会頭となった人物である。茶名を育齋といい、邸内の茶室延年楼で、有田常齋をはじめ、小山田不染軒、常照寺の松永徹道和尚、原尖庵など、名だたる茶人を招いて盛んに茶会を催した。

何陋会はその後の紆余曲折を経て、現在も活発に活動しており、また昭和 54 年には和田邸内の延年楼で茶を学ぼうという延年会が発足、市内若手経営者たちが石州流の茶を学んだ。このように延年楼は水戸の茶道の聖地とも言うべき存在である。